

全エッセイ集

第二

大江健三郎

文藝春秋

持続する志

全エッセイ集

定価 七〇〇円

昭和四三年一〇月三〇日 第一刷
昭和四三年一月二〇日 第四刷

著者

大江健三郎 ©

発行者

上林吾郎

発行所

株式会社 文藝春秋

一〇二 東京都千代田区紀尾井町三
電話(代) 二六五一一二一一番
振替口座 東京 七八七四三番

印刷所 図書印刷

製本所 中島製本

* 落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目 次

＊	この本全体のための最初のノート	11
---	-----------------	----

第一部	あらためて戦後的なるものについて	15
-----	------------------	----

＊	第一部のためのノート	17
---	------------	----

記憶と想像力（講演）	19
紀元節と個人の「自己」の問題	29
憲法第九条について	34
憲法九十二条から九十五条までについて（講演）	36
平和と戦争のイメージ	44
持続する志	55
不戦の誓いのひとつ	61
死んだ学生への想像力	64
山崎君の日記を読んで	70
「暴力」とはなにか？	72
ふたたび戦後体験とはなにか	73
辱かしめられた憲法とその「新生」	76
「国防教育」に反対する	78
『ヒロシマ・ノート』以後とわれわれにとって	81
沖縄とはなにか	81

第二部

＊	第二部のためのノート	83
---	------------	----

	『ヒロシマ・ノート』以後	85
--	--------------	----

	被爆者の自己救済行動	85
--	------------	----

	原民喜を記念する（講演）	93
--	--------------	----

	『原爆体験記』を読む	98
--	------------	----

	なにを記憶し、記憶しつづけるべきか？	104
--	--------------------	-----

	原爆後の日本人の自己確認	110
--	--------------	-----

	われわれにとって沖縄とはなにか	117
--	-----------------	-----

	沖縄の戦後世代	117
--	---------	-----

	戦後世代の中国・沖縄感覚	143
--	--------------	-----

	すべての日本人にとっての沖縄	155
--	----------------	-----

	沖縄の嘆きと憤りを共有するために	177
--	------------------	-----

	「沖縄の犠牲」とはどういう意味か（講演）	181
--	----------------------	-----

	核基地に生きる日本人——沖縄の核基地と被爆者たち	184
--	--------------------------	-----

第三部	政治的想像力	193
-----	--------	-----

＊	第三部のためのノート	195
---	------------	-----

	「期待される人間像」を批判する	197
--	-----------------	-----

第四部

恐ろしきもの走る——「日韓条約」抜打ち採決の夜	206
叛逆ということ	215
様ざまな民衆の虚像	226
アメリカの百目	237
もうひとつのアメリカ	245
「強大なアメリカ像」の崩れたあとに	251
「アメリカの夢」と暗殺者たち	258
鈍い人間の想像力	261
政治的想像力と殺人者の想像力	264
一票は武器か、精神安定剤か	284
文学と文学者	291

＊

第四部のためのノート	293
------------	-----

大岡昇平の人間と作品	295
------------	-----

父、母	295
戦後	312
死	302
自然	307

俘虜記・出征	320
野火	317
花影	318

安部公房その世界・その劇場・その案内	323
来宮心中・母・父・逆杉	321

安部公房劇場	324
安部公房案内	335

井上光晴にむかって	347
-----------	-----

谷崎潤一郎とエロティシズムの実験小説	361
--------------------	-----

中野重治と「梨の花」の文章	369
中野重治・魯迅・花	375
折口信夫——リアリストの感懐詩人	381
野間宏の持統	384
野間宏の『サルトル論』	385
堀田善衛とエラスムス	391
井伏鱒二と日本文壇の「原爆」概念	393
田村隆一と垂直的人間の声	396
ぼく自身の小説についての文章と文学および芸術にかかわるコラム	403
同時性のフットボール	403
自己の「根」を求めて	409
暴力的な思い出	412
「わが狂気」および「われらの狂気」	415
有効性の魔	416
言葉	419
ただ無知によって	422
犬殺しの歌	425
自己検閲の誘惑	426
性的なるものと緊張感	431
「夢の時代」への抜け穴	436
無邪気さのかげの恐ろしさ	439

第五部

舞台の上の自由人	441
裸体の栄光と悲惨	443
維新にむかつて、また維新百年の今日の 状況についての觀察的なコラム	449

*

第五部のためのノート	451
かつてオリンピックがあつた	453
七万三千人の《子供の時間》——オリンピック開会式	453
お祭りの教訓は現実生活では役にたたない——オリンピック閉会式	459
「維新」にむかつての觀察	466
絶望的な蛮勇気	466
「記憶して下さい。私はこんな風にして生きて来たのです」	470
新しいものと古いもの	474
恩賜的と恢復的	479
講演評	483
戦後の人間として「明治」を読むこと	487
維新百年の状況についての觀察	490
誰を方舟に残すか？——また余剰について	490
ホモ・プロ・セ——または自立について	493

＊

今日のなかの昨日と明日——または永遠について.....	496
自由人——または拘束について.....	499
土人部落のハックルベリー・フィン——または逃亡について.....	502
多様性コソカデアル——または同居について.....	505
火星人の威信——または異物について.....	508
宙に浮んだ馬——または瞬間について.....	511
シゴカレル思想.....	514
誰が本当に臭いのか？.....	517
「危険な思想家」と卑しい思想家.....	518
セントと銭.....	520
何が最も恐ろしいか？.....	523
ユートピアの想像力.....	526
テロは美しく倫理的か？.....	532
学力テスト・リコール・子規.....	535
この本全体のための最後のノート.....	542

持
続
す
る
志

この本全体のための最初のノート

《厳肅な綱渡り》を出版したあと今日にいたるまでにぼくの書いたエッセイ群を収録して、ここに刊行しようとする全エッセイ集第二を、ぼくが《持統する志》と名づける時、ふたつのことがあきらかにされなければならない。まず、ぼくの場合、学者としてその専門領域を鋭く限り、深めてゆくような人々とちがって、また実践家としてそのものの考え方を行動の壁をのりこえ、のりこえることによって確実にし、タフにする人々とちがって、ひとりの小説家としてエッセイを発表してゆく人間には、自分の書くすべての文章に、歪みと崩れたバランスがあらわれればあらわれなくなり、またそれを回復し平衡をとりもどすことができれば、やはりそれなりに、持続した責任をとりつづけることのほかには、仕事のすすめようがないといわねばならないということである。そこで、まず持続するという言葉をぼくは自分のエッセイ集のタイトルにみちびきいれたいの

である。

そしてまた志という言葉については、ぼくがこの言葉を硬化した精神による復古趣味において、いましばしば使用されているような意味によってではなく、もっと柔軟な意味あいでもちいている、ということをもあきらかにしておきたい。なぜなら、ぼくは、たとえば、自分は志という言葉に反発を感じる、というような意見をのべる人々に、ほとんどつねに賛成だからである。現実的にいって、ぼくはおよそ志士といったたぐいの人間ではない。ぼくがもちいる言葉としての志は、志士という熟語を決定しているような意味の言葉ではないのである。例をあげるとすれば、次の引用におけるジャック・ホーバンのような人間に、ぼくは《持統する志》を認めるものであるが、誰も、このジャック・ホーバンに志士という言葉喚起されはしないであろうからである。引用は渡辺一夫教授にお話をうかがう機会に、ぼくが質問の一部分として自分の考え方をのべようとした会話の一節である。おそらくぼくは自分の生涯の最上のものを渡辺一夫教授にあたえていただいた者たちのひとりである。それは東京大学の仏文科教室においてにとどまらず、しばしば先生のお宅にうかがったこともあったし、またひとりて途方にくれながら自分の仕事机のまえに

うずくまっている時においてもまたそうであった。おそらくぼくはここに収録したいかなるエッセイにおいても、次の引用で渡辺一夫教授に呼びかけながら自分の内部の報告をおこなっているように正直でないかもしれない。ぼくにとつては、この部分をふくむ渡辺一夫教授との対話が、かつて公的に印刷された先生との対話の唯一のものであるが、しばしば先生をお訪ねしてお話をうかがい、また自分の内部におこっていることどもを報告することによって、かき自分の《持続する志》に力と形をあたえられたか、はかりしれないのである。

《ぼくが読み得た先生のフランス・ルネサンスに関するご本のすべてのページのうちに、もともと鮮明な印象をぼくに残している人物は誰だろうかと考えてみたのですが、それは一五二五年のクリスマスの前の日にノートルダム寺院の前で、自分の書き、翻訳した本を読みあげながら、こういう志は棄てると自分を否定して破いていった、あのジャック・ホーバンという非常に若い人のことです。しかもジャック・ホーバンという青年はその辛い体験をした翌年には、あらためてもう一度最初の志にもとつて、ついに火刑に処せられたというのですが、先生が短い文章をそのために割かれている、この青年のことがぼくには忘れられません。

それは、ぼくも文章を書いて生きているからだろうと思います。われわれの現代では、フランス・ルネサンスのおそろしき、自分の文章によつて火刑に処せられるようなおそろしきはない世の中だけれども、やはりものを書くことは恐怖心をさそわれるような責任がありますし、ときには自分の書いたすべてを破棄したくなるようなこともあるからです。しかも、今後ともたびたびそれはあるだろうと思います。ぼくなどは実際弱い人間ですし、ぼくのために準備されたノートルダム寺院の前で、私が書いたことは全部間違っていました、すみませんでした、といつてあやまるようなことになるかもしれない。それを強制される時代がきそうだという気がしばしばいたします。しかし、その転向宣言のあとで、火刑にされるところまでなんとか自分をもち直した青年のことを考える。そして、自分も火刑には処せられなくても、軽蔑されたり処罰されたりしながら、なんとか最初の志を回復することになればいいという希望を、右のような時代への恐怖と共にもっているわけです。》

さて、この本は確かに《厳肅な綱渡り》につづいて全エッセイ集第二と呼ばれるべきものであるが、単に形式的にそうなのではない。《厳肅な綱渡り》におさめた数かずの文章があらかにはしているように、ぼくは安保体制に反対し、

反対しつづけることを望んでいる戦後世代の人間である。そのようなひとりの人間が、小説家として、また民衆の一員として、ますます政治的に強化されるばかりか文化的浸透力をも増大させているところの安保体制下でいかに生きてきたかの、現場報告としてぼくは本書を刊行したいのである。戦後世代からも、いまや秀れた学者たちや遅ましい実践家たちが、その豊かな成果を発表する時期が熟してきた。ぼくの全エッセイ集が、これらの本格的な書物と同じ書棚に並べられることは望みえぬとしても、ともかくあらためておなじく戦後世代の声を発してかれらの合唱に加わることを希望してぼくはこの本を刊行する。それはまたしだいに高まり権威として固定化する反・戦後的なるものの合唱にさからって、ということでもあるであろう。

この反・戦後的なるものの合唱は、たとえば戦後の民主主義時代の言論を、「言葉の暴力」だとみなしているような人々から、いうまでもなく戦前・戦中を、戦後をすつかり跳びこえて今日と明日につなぐとしている人々に、戦後的なるものへの意識的・無意識的な無感覚に支えられた人々をふくめて、いまや明瞭にひとつのエスタブリッシュメントの観を呈している。政府筋からいわずの財界をもふくめて、つねにエスタブリッシュメント的なものの味方

であった者たちは、もちろんのこと、この新しいエスタブリッシュメントを歓迎して様ざまな動きをおこしている。ぼくの知るかぎりでは、いわゆる「自由主義圏の先進国」でこの種の文化統制が白昼公然とおこなわれようとしている国は、今日、他に例を見ない。またぼくの知るかぎりでは、今日そうした状況にもっとも酷似している状況として浮びあがってくるのが、さきの戦争直前のそれである。それはたとえば中野重治氏が『閏二月二九日』において批判したような状況である。この文章が書かれたとき、まだ一歳の赤んぼうにしかすぎなかったぼくが、そのかつての状況を記憶しているというのではない。しかしぼくは現在の状況をつぎの戦争直前の状況として想像力をはたかせることはできる。ぼくはあらためてそのような想像力の上になちながら今日の状況を考えようとする目的をも持って本書を刊行し、そのような意図をそなえた読者を与えることをもまためざしている。

《厳肅な綱渡り》に収録した文章はかなり永い期間に分散して書かれたものであったために、読者への通信として＊マークを幾つかのエッセイに附したが、本書では、それをおこなっていない。ここに収録した文章は、ぼくの三十歳から三十三歳の秋にいたるまでに書かれたエッセイ群であ

ってそこにはいくらかなりと統一があると思うからである。